

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さんぼう

三方よし

第52号

2024/7

CONTENTS

松居久右衛門家屋敷が蘇る	2
松居久右衛門家の家風をしのぶ 末永國紀先生講演録	3
てんびん棒	8



日除けや魔よけの意味がある猪目紋様の書院窓越しに今盛りの紫陽花が美しい人気のスポット



教林坊別院：マーチャントミュージアムの玄関

長く無人で取り壊しも検討されていた東近江市五個荘
 竜田町の松居久右衛門宅を平成20年に教林坊住職の
 廣部光信さんが譲りうけ、15年間、ほぼ独力で修復
 され昨年4月にマーチャントミュージアム教林坊別院
 として開館。屋敷は国登録有形文化財、庭園は国登録
 記念物の指定を受ける

松居久右衛門家屋敷が蘇る

松居久右衛門家屋敷を修復された廣部光信館長から、その経緯や松居久右衛門家のことをお話いただき、その後屋敷内をご案内いただいた。



マーチャントミュージアム館長・キュレーター
の廣部光信さん
1971年近江八幡市生まれ、教林坊住職



上段の間のある座敷にて廣部館長より屋敷内のご説明を伺う参加者たち

皇族がお泊りになった 豪商家屋敷

白洲正子が愛した寺院として有名な教林坊もかつては随分荒れていた。廣部さんは、近江八幡市安土町石寺の天台寺院のお生まれであるが、初めて教林坊を訪ねた時に廃墟のような荒れ寺が観音浄土のように思われて復興を決意されたという。教林坊を見事に復興された廣部さんに松居家屋敷修復の打診があり、再び、松居家屋敷の復興作業が始まったという。



結界の向こうには米俵、農業余業の五個荘商人らしい



南蔵の地下石蔵の万両庫

豪商の証「万両庫」

主屋は文化11年(1814)の建築で、江戸時代には敷地内に5棟の土蔵が建ち、明治・大

松居家旧宅は竜田村が一時賀陽宮(その後久邇宮となる)の領地になっていった関係で、賀陽宮家から「松樹」という扁額を頂かれたことから「松樹館」と呼ばれるようになっていた。そして、大正13年(1924)には久邇宮朝彦親王の息子の邦彦王らが龍田神社参拝の際に宿泊されたことからこの屋敷は増改築され、上段の間が作られるなど高い格式を供えている。屋敷内には、日本最古といわれる洋式トイレがあり、御座所には洋風の調度がおかれている。



勝元宗益(鈍穴)作と伝わる登録記念物の指定を受ける庭園

正・昭和初期に増築されてきている。主屋から東南の位置にある文庫蔵は格式をもって作られ、掛け軸や屏風などが納められ、その奥の「南蔵」には石造りの隠し金庫「万両庫」が作られている。ここには千両箱が10箱収まるという。見た目が立派な文庫蔵でなく、わざと簡素な南蔵に作られたのは、泥棒を欺く知恵だといえよう。マーチャントミュージアムの見学後には、会場を外村宇兵衛旧宅を改修し研修・宿泊施設となっている「ニッポニア」に移動し、末永國紀顧問よりより詳細な松居久右衛門家についてのご講演をいただいた。

松居久右衛門家の家風をしる

同志社大学名誉教授 末永 國紀 氏



図1 松居久次郎行商の図(長寿寺蔵)



図2 俊恵(長寿寺蔵)近江商人績寫真帖より

先ほど皆様とご一緒に見学しました松居久右衛門家の先祖について、マーチャントミュージアム廣部光信館長からお話を伺いましたが、より詳しく実証的にたどってみます。

廣部様からのお話にてきた、財布を拾った久次郎は久右衛門家のご先祖です。そして財布を落としたのは播州赤穂の神宮寺の俊恵というお坊さんですが、この俊恵が、久次郎という拾い主に対するお礼を言いたくて、それを書き物(図3)にしています。従って廣部館長のお話は非常に信憑性のあることなので、最初に、久次郎という松居久右衛門家の先祖についてご紹介しましょう。

図2の僧侶の姿をしているのが俊恵です。そして図1の天秤棒を担っているのが松居久右衛門家初代の久次郎です。久次郎の法名は慶心といいますが、これは商いを始めた頃の姿を絵にしたものです。

久次郎の格好は、確かに笠をてんびん棒の両方に担いでいま

す。表情は、やっぱり46歳にふさわしくもう年を取った表情になっています。「人生五十年」の時代でしたから、46歳になって、まだこのような姿をしているというのは、よほどのことなのです。久次郎は、俊恵に自ら「自分は貧しい農民だ」と紹介したそうで、俊恵の残した書状にそのことが書かれています。俊恵が大金を置き忘れたのは、寛文4年(1664)9月16日、多賀大社参詣を終えて赤穂への帰路、中山道を下って、三上山近くの小堤村で休憩している時のことだったので。腰を下ろ

俊恵の置き忘れた73両2分

俊恵が置き忘れたお金は、73両2分と言いましたけれども、どんなお金だったかといえますと、おそらく慶長一分判金だったということが出来ます。そのころは、これしかなかつたのです。一分判金は金と銀でできて

いるのですが、その純度は85%くらいのお金だったとこのことで、非常に純度が高いと言いうことが出来ると思います。つまり、現在の貨幣価値でみるとだいたい1個70万円から35万円くらいという事で非常に高価です。

一分判金の大きさは、横は1

して休憩していて、出立するときに、切り株の上に載せた金袋を忘れてしまい、しばらくして忘れたことに気が付き、慌てて戻った時に久次郎に出くわしたのです。

この時、久次郎が持っていた商品は、本当にささやかなものでした。豊の材料にもなるイ草で編んだ編み笠を担いでいるだけがありつたけの商品で、それはいくらにもならなかつただろうと思います。最初はこのような小さな商いから始めて、次第に資金を積んでいったのです。

センチ、縦は1・5センチくらいで重さは4・3グラムくらいです。

一分金1枚が4・43g、一分ということは、これが四つで1両ですから73両は292枚の一分判金で、4・43g×292枚＝1,293g、つまり73両、それと2分という金の重さは1キロを超える重さになります。1キロを超えるものを抱えて旅をするというのは、なかなか大変なことだろうと思います。正確には1・293キロとなるので、1・3キロのものを抱えるとい

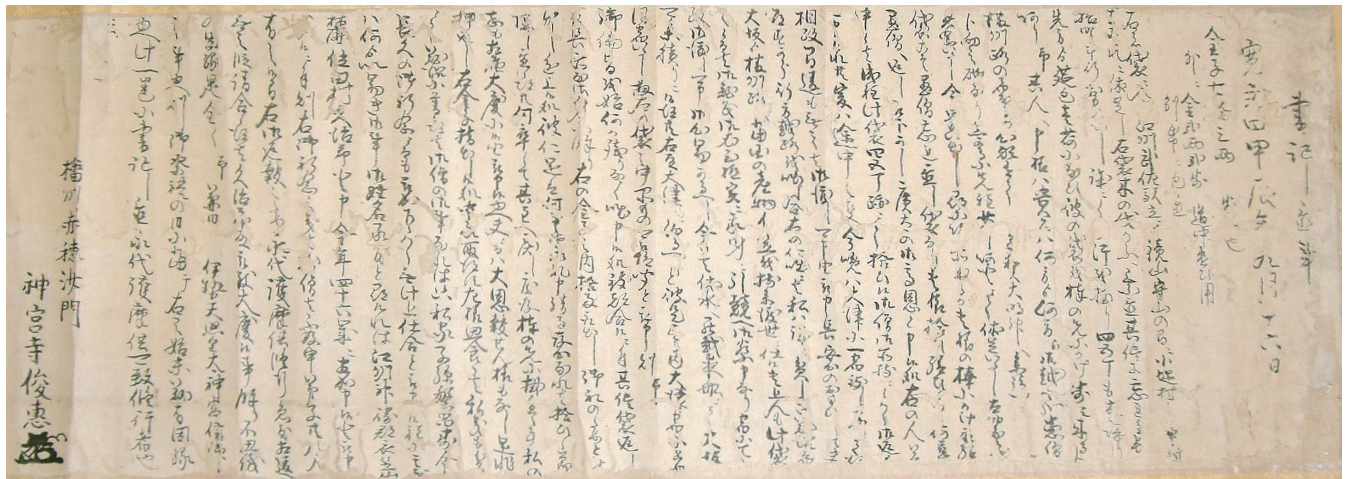


図3 俊恵の消息文 久次郎との出会いと、久次郎の正直・清廉さに感心し、久次郎の繁栄を祈願した経緯を記している(長寿寺蔵)近江商人博物館提供



※長寿寺

鈴鹿山脈に近い東近江市池之脇集落に建つ長寿寺は、751年に現在地より1kmほど離れた山中に良弁僧正が開創したと伝わる。慈覚大師円仁が訪れて天台宗の寺となり、七堂伽藍を備えた大寺であったらしい。戦国時代には佐々木氏の祈願所として大いに栄えたが、織田信長によって焼失。1659年現在地に再興。大石内蔵助の師・俊恵和尚が修行で滞在したことから、内蔵助との書簡や絵図が残されている。

うことは相当重たかっただろうと思います。
例えばスイカを持って歩くとする、最初は軽いなと思っ
ていても、持って歩いていくうち
にずしりと重くなつてきます。
俊恵はこうした重いものを持っ
て播州の神宮寺へ帰ろうとして

松居久左衛門家に残る「書記し置事」

俊恵が書き残した礼状の写し
が、実は松居久左衛門家文書の中
にあります。ここには「本本
家先祖主人由来写」と書いてい
ます。「本本家」というのは、松
居一統の本家、松居久右衛門家
です。そして、その分家の一つ

いたのです。途中で休みたくも
なりませんね。

図3には、「播州赤穂沙門 神
宮寺俊恵」と書いています。も
うすり切れていますが東近江市
池之脇の長寿寺に現存していま
す。

が松居久左衛門家だったのです
が、松居久左衛門家も本家にな
るわけですから、「本本家」とい
うふうを書いてあるのです。こ
れで、松居久左衛門家のことだ
ということが分かります。読み
やすくした資料を用意しました
のでご参照ください。(図4)

久左衛門家に残る書状には
「書記し置事」と書いてあり、「寛
文四甲辰年九月十六日」の出来
事であり、「金子七拾三両」と
「外二 金貳両貳分」、これは道
中に使う旅費なので「別紙二包
置」と書いてあります。他にも
先ほどの廣部さんの話と同じよ
うな内容になっておりますが、
もっと詳しく書いています。

図4にはイロハニホトチま
で分けて掲載しましたが、これ
を見ますと、非常に詳しく書い
ています。

小堤村という村はずれで休憩

した、そのときに忘れた。1キ
ロメートルぐらい行つてから思
い出して、倉皇として走り帰っ
た。そうすると、そこに久次郎
がイ草の笠をてんびん棒に担っ
て、「てんびん棒の先に1・3キ
口の袋をぶら下げながらやっ
て来る人がいた。」と書かれて
います。

そこで「それは自分のもの
だ」ということを言ったのです。
だけど、久次郎はすぐには返さ
なかつた。「自分は、いまから大
坂を経て播州へ行くつもりだか
ら、今日は大坂に泊まるつもり
だったけれども、それを大津の
宿に変更する。そこまでついて
きて、そこで改めてから、あな
たものであれば渡ししょう」と
言った。

それで二人は小堤村から大津
までずっと歩いていったのです。
そして、大津の宿に着いた後、
二人は相対して、そこで俊恵の
言ったことは本当かどうかとい
うことを確認しています。そし
て、確かに間違いない、73両2
分あるということが分かり「こ
れはあなたのものだから返しま
すよ」と言つて、あっさり返し
たのです。びつくりしたのは俊
恵です。

こんな大金を拾った人に対し
て、10両を進呈しようとしたけ

本本家先祖主人由来亭
 書記し置事
 寛文四甲辰年九月十六日
 一 金子七拾三両 歩金也
 外二 金式両式分 道中遣ひ用
 別紙ニ包置

右は袋二入れ置、江州武佐駅立二而、鏡山守山の間に二小堤村と欽申村端れに休足し、右袋木の伐株、江兼置、其依に忘れ置、頓て拾丁斗行思ひ出し、誠二手に汗を握り四五斗も走り、先方分違包巻荷になひ、彼の袋を棒の先につかみ歩み来る人あり、予、其人江申様は、貴公は何方分何方江御越二候哉、愚僧は播州路の者なるが、心願有之、多賀大明神江参詣いたし只今下向の砌なり、

しかるに先程少しあにて休足いたし、大切なる袋を失念致し、今思ひ出したすねに帰る所なるが、貴様の棒にかけ置給ふ袋こそ愚僧忘れ置し袋なり、貴様拾ひ給ひ候へ、何卒愚僧江返し被下かし、広大の御高恩と申候処、

右の人答申候は、成程此袋四五斗跡にて拾ひ候、御僧所持二候ハ、御返進可申けれ共、爰は途中の事、今晚は天津にて宿いたし宿二而得と相改、間違も無之は御渡し可申由被申吳、安心のおもひして、夫より道す柄行方越路を咄し合、

右の仁咄二ハ私ハ誠に食し難渋ものにて、大坂分播州路へ当国の産物イ笠を持参、渡世し仕候、貴上人も此袋無之に而は御難儀御尤至極、実ニ我身に引籠へ御察申なり、宿にて相改御波可申、御心易かるへし、今日は伏見江罷越夜給二て大坂へ可参積り二候へ共、右故大津に泊るへしと、彼是する内大津宿に着、同宿いたし、扱右の袋の中品の可被仰聞と被申、則予

御論旨を始何か残なく咄申候所、致都合候ニ付其袋返し被吳、忝なき身に余り、右の金子の内拾、兩取出し御礼の爲と指出し進上候所、彼仁、是は何申そ、御礼申請る存心なれば拾ひ候節隠し置候へとも、何卒して其主江戻し度存、棒の先に懸置候事、私の志も相届大慶に候由被申候故、

へハ二而ハ大恩報せん様もなし、是非と押返し右金子指出し候処、中々以取得す、左様思食候ハ、私義も貧家に難儀に暮し候へハ、御僧の御申なれば、只私家子孫繁昌寿命長久の御祈念二而も被成下候ハ、無此上仕合と被申候程に、ト 其義ハ何分以易き御事、御姓名承り度と尋ケれば、江州神崎郡衣笠山麓位田村久次郎と申今年四十六歳二相成申候と被申聞候ニ付、則右御祈念之義ハ拙僧ハ不及申弟子共八人有之候間、右御返報のため永代護摩供修行急度相違無之段請合候へバ、久次郎殿被致大慶候、

予 事余り不思議の因縁、是全く予、兼日伊勢天照皇大神宮信仰の事故、則御祭礼の日に当テ右の始末難有因縁ゆへ、此一巻に書記し置、永代護摩供可致修行者也云々

追加
 右為返報久次郎殿其節の姿給か、せ、予一代礼拝慕敬怠たらず、末世にても右陰徳感服して謹而礼拝尊敬すへし
 うれしさを
 書置龜の
 すえかけて
 久次の采へ
 守らせ給へ
 右当国池の脇村長寿寺と申寺ニ、繪姿一幅右の通りの書物御座候、右仮写遣云々

播州赤穂沙門
 神宮寺俊恵
 書印有

図4 本本家先祖主人由来亭

第1表 松居久右衛門家の蓄積過程

年号	西暦	有銀(貫)
正徳3	1713	29.939
4	1714	31.996
5	1715	38.385
享保元	1716	43.274
2	1717	50.595
3	1718	70.234
4	1719	87.985
5	1720	103.493
6	1721	31.270
7	1722	35.214
8	1723	40.854
9	1724	46.401
10	1725	55.200
11	1726	58.208
12	1727	66.214
13	1728	64.810
14	1729	67.146
15	1730	70.189
16	1731	74.040
17	1732	82.116
18	1733	81.873
19	1734	86.438
20	1735	93.904
元文元	1736	85.338
2	1737	144.559
3	1738	172.274
4	1739	183.350
5	1740	192.250
寛保元	1741	183.092
2	1742	191.706
3	1743	201.898
延享元	1744	214.257
2	1745	224.060
3	1746	225.947

(註) 1. 享保5年には、「此年慶長銀示也、古金ニ替り申候、改廿五貫百七拾壹匁」との注記あり。
 2. 元文元年には、「此文銀出、五割増、此銀百廿八貫目也」との注記あり。
 (出典) 延享3年「書出張」(#262)より作成。

れども、久次郎は決して受け取らず、「それをもらう理由がない」と拒み続けます。俊恵がなぜかと聞くと、「自分ものにしてやうと思うのであれば、てんびん棒の先にぶら下げていったりしない。さだめし忘れた人は大変な目に遭っているだろうと思つて、落とし主を捜すためにぶら下げてやつて来たのだから、お札なんてとんでもない」と言つて固く辞退したのです。

その後の松居久右衛門家

この久次郎が松居久右衛門家の先祖ですが、その後についてみてみましょう。第1表を参照ください。「松居久右衛門家の蓄積過程」これは純資産を表示したものです。正徳3年(1711)から延享3年(1746)までの40年近くの間の純資産の蓄積の過程です。これは、分家の松居久左衛門家の「書出張」という勘定帳の中に載っていました。本家の純資産の状況が、分家に残つて

押し問答の末、それならばというので、久次郎から「自分の家の長久、長く栄えることを祈つてくれ」という提案を出しました。すると、俊恵は「それはもうお安いことです」と言い「これからずっとあなたのご恩を忘れないために、護摩供養をいたします」と言つたのです。

こうした二人のやり取りが、一方の当事者の俊恵の手によつて、詳細に記されていたのです。

いる、ということとはよくあります。伊藤忠の場合でもそうです。伊藤忠兵衛家と伊藤長兵衛家は兄弟ですから、長兵衛家の資料の中に忠兵衛家のところの純資産が書いてあるということがあります。ですから、これは全然不思議でも何でもないわけなのです。

第1表は2代目久右衛門のときの記録ですが、最初の正徳3年のときの純資産は、銀にして29貫939匁です。1両が銀60匁として換算すると、だいたい1800両です。そして最後の延享3年(1746)ちょうど30年ぐら以後には、銀225貫947匁ですから、両に換算しますと、1万3500両くらいになり、順調に資産が伸びていったと言ふことができます。



図6 松居久左衛門(遊見) (近江商人博物館蔵)

財産分与による分家創出		
三代目	久右衛門	銀80貫目
	庄右衛門	銀50貫目
	久左衛門(遊見家)	銀45貫目278匁8分
	市右衛門	銀45貫目
寛政9年(1797)の財産分与		
	本家久右衛門	銀136貫目751匁7分
	忠右衛門	銀75貫目213匁5分
	覚右衛門	銀61貫538匁2分

図5 財産分与による分家創出

財産分与による分家創出

松居久右衛門家では、財産分与による分家創出を2回行っていきます。分家を創出するために2代目は、まず自分の長子に銀80貫目を譲り、あとの3人の息子には、銀50貫ぐらいうづつ、あるいは銀45貫目を分与していません。

このうちの久左衛門が遊見家です。松居遊見(図6)が出た分家のことで銀45貫目278匁8分を譲与されています。松居遊見は、仏教の非常に篤信家の人であったようです。

最初の分家創出のための財産分与は延享3年で、ちょうど江戸時代の中期で三つの分家ができました。松居家一統です。さらにその次の3代目も寛政9年

善行が積み家業の隆盛へ

このように、先祖の間に非常に善行を積んだということが、結局、後にもずつと商売に優れた子孫を生み出したと言いうことができると思います。つまり、落とし主の迷惑を考える。自分は貧しい農民だけでも、落とした主の迷惑を考えるとできなかったという事です。欲得づくではなかったということ、久次郎さんはそういう人物であったのです。

(1797)に財産分与を行っています。このときは、本家に8160両を残して、あとは忠右衛門と覚右衛門にそれぞれ半分ずつぐらいい、5000両ぐらいうづつを分けています。

ちよつと考えにくいぐらいではないでしょうか。73両は、今のお金にすると1000万円近いと思います。

要するに、慶心は、自分の身は貧しいながらも、大金を拾っても、それを自分のものにしようとしなかった。そして、それを返すときの慎重さ、非常に理にかなったやり方で返してあります。そして、謝礼を受け取らず、自分の家が、子孫が長く栄えるようにということを祈ってくれということだけを、条件として出した。こうしたことがやっぱり結果としては、この松居家の長久につながったと言いうことができるかと思えます。

図7は近江商人の番付です。要するに近江商人の稼ぎ高の順位ランキングです。ここに一番大きく書かれているのは、外村

そしてさらに、3番目としては、謝礼をあくまでも拒絶したという、その清廉さですね。普通

与左衛門です。駐車場からここ(ニッポニア五個荘)に来る途

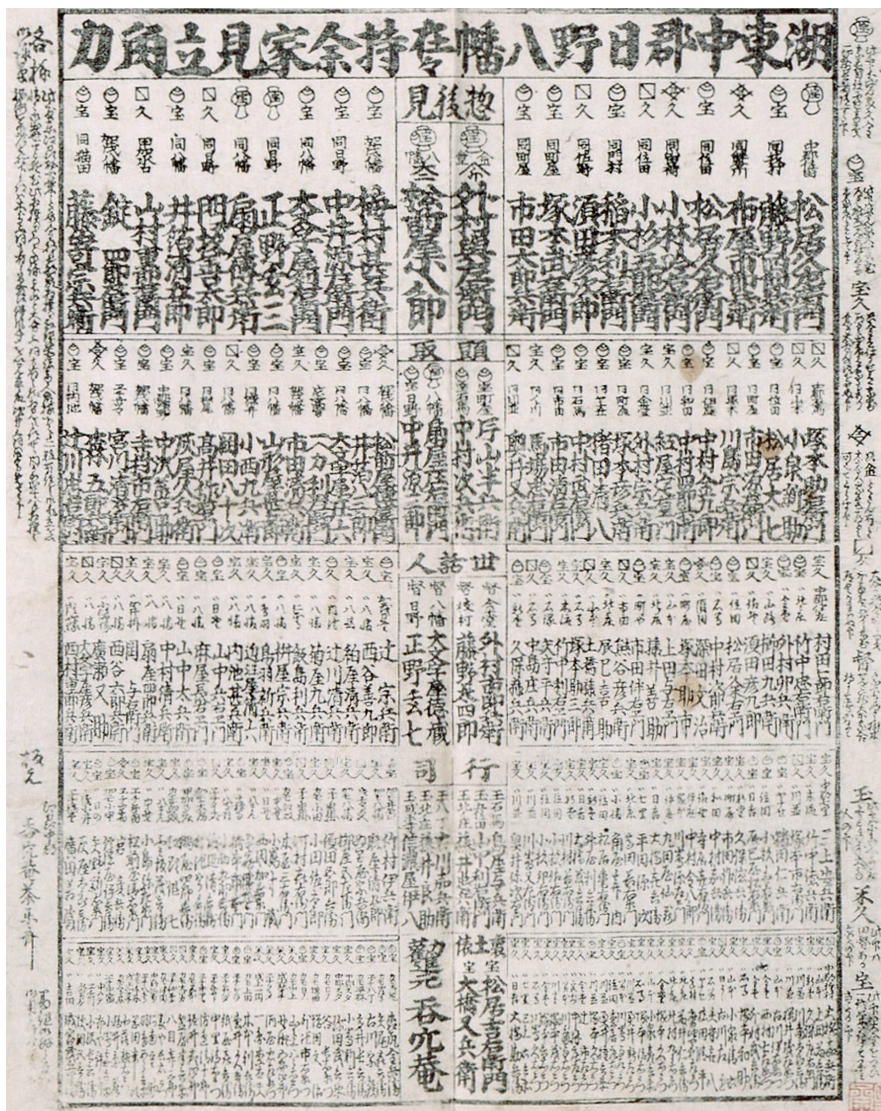


図7 「湖東中郡日野八幡在々持余家見立角力」(近江商人博物館蔵)

中に弘誓寺の隣に大きな家がありました。外村家は300年以上続いています。その隣の松前屋小八郎といふのは、北海道交易で財を成しています。この二つが「惣後見」という一番大きな字で書かれています。

そして東の横綱を張っている

のが、分家の松居久左衛門(遊見)家です。その次の藤野四郎兵衛家は豊郷枝村の商人で、北海道で活躍した人です。その次の布屋市郎兵衛は能登川の阿部市郎兵衛家のことです。その次が松居久右衛門家です。その次が小田町の小林吟右衛門そして小杉五郎右衛門、稲本利右衛門、

須田彦次郎、塚本定右衛門、市田太郎兵衛と、そうそうたる近江商人が並んでいます。このように久右衛門家では商才豊かな子孫が続いたわけですが、ずっといいことばかりではなかったのです。

両替商伊勢屋藤兵衛の倒産とその影響

文久元年(1861)に伊勢屋藤兵衛という京都の大手の両替商が11月7日突然に倒産します。伊勢屋藤兵衛(伊勢藤)は代表的な両替商で、近江商人たちの機関銀行だったので、たくさん近江商人が、伊勢藤にお金を預けていました。それが突然に倒産したので、多くの近江商人が大きな損失を被ることとなりました。そのときの伊勢藤の純負債額52万5341両と銀3607貫目(取引先212人)で、久右衛門家はこのとき10万両超えの預金を持っていたのです。このとき一番大きな被害を受けたのが小林吟右衛門で、14万両ちよつとです。

この幕末におこった起きた伊勢屋藤兵衛の倒産事件は、幕府の出入機関である京都西町奉行

所が乗り出しましたが、結局お金は戻ってきません。それでも小林吟右衛門家も松居久右衛門家も、連鎖倒産するどころか、その後、また復活しています。そこが近江商人のしただかさといえるのでしょうか。とにかく商人たちの願望は、大金を一気にもうけるということよりも、長い時間をかけて儲けていくということで、自分の子孫が長く続くことを祈っていたのです。

そういう意味では、現在の日本の企業も一気に興隆を望むのではなく、着実に自分たちが存続していくということを一番大きな目的にしてほしいものです。要するに「三方よし」といこうとです。

「三方よし」表現の初出

最後に「三方よし」という言葉がいつ出てきたかということを紹介いたします。江戸時代には「三方よし」という言葉がなかったという見方をする人もいます。

しかし、そうではないだろうと思ひ、江戸時代の文献を探そうとしたのですが、あまりにも膨大過ぎます。そこで、難しい言葉で文章の中に入ってきたのは駄目で、大衆的な一般的な書物の中に使われていることが好ましいと思ひ、一般庶民が読む読み物で、5、6枚のページしかなく、一般の庶民、女性

「三方よし」表現の初出の部分

おせきさまがおかはゆくバ、くるわへあしもむけまいと
のせいしをおかきなさる、と、こう七どの尔それをわた
し、ごかんだうのゆるりやう尔、およばずながらいたし
ませう、さうしてあなたをとりもどせバ、お心ざしもむ
そく尔せず、つとめにださねバおみをもげがさず、一も
んじやもさらりとすめバ、かほもたつて三方よし、なア
もうし、おせきさま「あいあいさうしてくださんと、と、
さんのおみのため(後略)

(末永國紀「近江商人の経営と理念 三方よし精神の系譜」
清文堂、830頁)

図8

でも子どもでも読めるような字
で書いてある読み物の草双紙類
をさがしてみたところ、『昔々歌
舞妓物語』という黄表紙の本に
出ていました。

作者の柳亭種彦は、もとは2
00石ももらっていた旗本で食
べるに困らなく、道楽で書いて
いたのですが、やがて戯作者に
なり多くの作品を残しています。
この柳亭種彦の書いた『昔々歌
舞妓物語』の「妓」というのは、
女偏になっています。(図8)

これは、郭の物語、遊郭の物
語を取り上げたもので、ここに
「三方よし」と書いています。こ



ういう一般庶民が読む本の中で
「三方よし」という言葉が、文政
13年(1830)に登場していま
すので、この時代にすでに社会
で使われていた言葉であること
が明確になったのです。

ただ、言葉の意味としては、
3人の利害関係者がうまく調整
が取れるという意味で「三方よ
し」が江戸時代から使われてい
たといっているのでしょうか。



講演いただく末永國紀顧問



ニッポニア(旧外村宇兵衛邸)玄関

■質疑応答(抜粋)

- Q1 彦根藩内では井伊家に遠慮して名字に「井」を使わないと言われますが、松居家もそうだったのでしょか？
- A そうだと思いますよ。
- Q2 江戸時代にだれが「三方よし」を最初に言ったのかは、わかっているのではありませんか？
- A 江戸時代の文書を探し当てたことがやっとの事でした。いまの段階では分かっただけです。
- Q3 当時は「売り手よし・買い手よし・世間よし」の「三方よし」とイコールではないですね。
- A イコールではないです。後の時代の方が、「売り手よし・買い手よし・世間よし」を付けました。
- Q4 伊勢藤は、なぜ倒産したんでしょうか。
- A 話せば長くなりますが、当時の日本国内での金と銀の交換比率と世界的スタンダードの交換比率が全然違っていたということが原因でそこに幕府の金貨改鑄通告が突然あり、流通通貨が投機商品になり、それを利用して藤兵衛は儲けようとしたのが倒産の原因です。詳しくは拙著をご覧ください。

てんびん棒

三方よし研究所の第22期が始まりました。6月8日には、東近江市五個荘で総会を開催しました。ご参加の皆様ありがとうございます。

当日は昨年オープンしたマーチャントミュージアムの見学、研修・宿泊施設「ニッポニア」での講演会・総会と昼食会、最後には理事長宅での、豪商ならではの骨董の虫干しにお誘いいただき大きなおまけがついて、なんとも贅沢な一日でした。当日の様子を本誌で掲載しましたので改めてご覧ください。

後に豪商となった家系でも創業当時には多大な苦勞があったことは多く語られますが、同時に正直、清廉な気持ちと永続への強い意志が重要なことを教えられました。

コロナ禍が収まり、海外から日本のビジネスの神髄を学ぼうと韓国・中国からの来訪者が、以前のように戻ってきました。氣迫を感じる彼らに負けぬよう、本家の現代企業人は、いまこそ、氣持ちを引き締め、企業永続の先駆者として、範を示せるようにしたいものです。本年度も斬新な企画で事業展開を予定しています。ご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。